

[論文]

国立ハンセン病資料館事業部社会啓発課の活動と展望

儀同 政一 金 貴紗

1. 2014年8月に学芸部社会啓発課が 2人体制で発足

ハンセン病患者・回復者への偏見・差別と人権侵害の再発防止には、ハンセン病についての正しい知識が不可欠であり、ハンセン病を理由として人を差別し、地域社会から排除することは許されない。病気がその人の姿かたちをどのように変えようとも、人は人として尊重されるということを繰り返し学習することが大切である。

ハンセン病患者・回復者に対する偏見・差別、排除の解消と名譽回復のため、私たち社会に同じ過ちが繰りかえされないため、より多くの方々に当資料館に来館していただきたいが、遠方の方など当館への来館が難しい場合が多くある。ハンセン病問題に対する啓発活動は全国規模で行われるのが望ましいと考える。そのため、外部講演、また、自治体等が主催する写真パネル展への講師派遣、語り部DVDや啓発DVDの作成、啓発用パンフレットの作成と普及など啓発事業を強化推進するため、2014年8月に社会啓発課が発足した。社会啓発課の主な事業は下記の通りである。

1) 教育啓発活動

- a. 講師派遣：市民公開講座、新任職員人権研修会、人権担当教員・職員研修会、小中学校等の教育機関、医学部・看護学部などの講師派遣
教員免許更新講習：10年目研修、教員研修プログラムの研究、東京学芸大学教員免許更新講習の実施
- b. 講演内容：ハンセン病医学、ハンセン病の歴史と政策、ハンセン病療養所と入所者の現状、人権についてなど。
- c. 時間：1時間～2時間、
- d. 費用：無料

2) 教育委員会に対する小中学校の誘致活動

教育委員会に資料館の人権学習プログラムを説明し、小中学校の来館について誘致活動を行う。

3) 「ハンセン病と人権」夏期セミナーの開催

教員の方にハンセン病問題について正しい理解をしていただき、生徒たちにハンセン病問題を通して、命と人権の尊さと大切さを伝える教育を取り組んでいただくため、教員を対象としてハンセン病問題を総合的に学習できる「ハンセン病と人権」夏期セミナー（参加費無料）を開催する。

4) 英語版啓発DVDの作成

英語版「ハンセン病を知っていますか」を作成（2016年に作成）

5) ハンセン病関連機関、学会・自治体・学校・地域との連携

- a. 社会交流館・歴史館、学芸員との連携
資料館・博物館、大学等関係機関との研究連携
- b. 市民公開講座・講演会の開催：市民、学生、教職員、医療・福祉関係者など
- c. 学会、他の人権団体と交流・連携し、疾患・障がいを持っている方への偏見・差別、人権侵害について調査・研究を行う。
- d. 学会：学会発表、論文発表、
- e. 研究連携：研究費獲得、大学・研究機関との共同研究の推進

6) 情報センター機能

・ホームページの充実
キッズコーナー、Q&Aコーナー、英語ページの充実をはかる。

2. 「ハンセン病と人権」夏期セミナーの取り組み

2015年「ハンセン病と人権」夏期セミナーの開催

2015年8月19日・20日に国立ハンセン病資料館で教員を対象に、21世紀を担う子供たちが困難に立ち向かい思いやりの心を持ち、お互いの個性や違いを認め合い、命と人権を大切にする人権教育を進めるためのきっかけを作っていただくための「ハンセン病と人権」夏期セミナーを開催し47名が受講した。募集要項には、対象を小中学校の教員・養護教員としていたが、高校や大学の教員、教育委員会、社会福祉協議会などからも是非参加させて頂けないかと強い要望が出されたため、定員に満ちていなかったことから参加を認めた。開催日程は、教育委員会に教員が夏期研修として参加しやすい日程をお聞きし決めた。近隣の教育委員会と校長会で夏期セミナーのお知らせをしたが、インターネットでハンセン病問題について検索し、資料館のホームページで夏期セミナーのことを知り受講を希望したという参加者の方が多くなった。

配布資料として、日程表、講演レジメ、資料、出張講座の案内を入れたファイルをお渡しました。19日は、開校式では館長挨拶と館長ミニ講演、DVD「ハンセン病を知っていますか」上映、語り部・平沢さんの「人生に絶望はない—ハンセン病とともに70余年—」、金学芸員の「ハンセン病問題の歴史と資料館のあゆみ」、「資料館見学」を行った。初日の最後に参加者と「意見交換会」が行われ、長野県の教員から、「学校で人権の授業をしてきたが、実感を伴って、自分自身のものとして語れないことがあって今回参加した。今回の講座を楽しみにしている。病気になっても人は人、共感していかなければならない、自分が病気になつたらどうなんだろうかということを考えていかなければならないということをお聞きしてハッとさせられた。患者は大変な生活をさせられていた。あのようなことを国はしていたんだということを、第三者的に言っていた自分がいた、これからは、自分自身のものとして語れる授業をしていきたい」と感想が寄せられた。

20日は、儀同社会啓発課長の「ハンセン病医学」、

黒尾学芸部長の「多磨全生園内フィールドワーク」、語り部・佐川さんの「ハンセン病と人権」、最後にハンセン病問題を通して子ども達が命と人権の尊さを学び自己の行動につなげることのできる授業実践をするために佐久間建氏の「ハンセン病問題を授業化するには」の講演を行いました。講演終了後の討議で、平沢さんから「今後、学校、保護者、子供たちが一緒になってハンセン病問題を通して、命と心の教育を一歩ずつ広げて行く取り組みを進めていただきたい」との発言があった。講師の佐久間氏からは、子供たちに「今日、人権問題を学習したことを、親にも気持ちを伝え話し合いをしましょう」と宿題を出しているとの補足発言があった。

閉校式では、夏期セミナーが業務の一環として認められるよう修了証書を発行した。

夏期セミナー修了後、参加者からアンケート33通が寄せられた。8月21日の読売新聞には夏期セミナーの記事が掲載された。今回の「ハンセン病と人権」夏期セミナーの開催が、教員、社会福祉協議会、人権担当者、教育委員会などから期待されていたということがよく分かった。今後、夏休みだけでなく冬休み・春休み開催、一日講座、土日連続講座、授業実践のための研究会、平沢さんと話そう会+親子で学ぶハンセン病、教員向け講座、出張一日セミナーなどの具体化を検討している。夏期セミナー終了後、セミナーに参加された横浜市的小学校教員から6年100名の講演依頼があった。また、沖縄愛楽園入所者自治会より依頼があり、2016年度から毎年、同園交流会館において教員向け講座で講演を行っている。

2015年夏期セミナー参加者

職種	人数(人)	%
小学校	16	34.0
中学校	10	21.3
高校	3	6.4
大学	6	12.8
教育委員会	2	4.3
社会福祉協議会	2	4.3
人権啓発センター	1	2.1
会社	6	12.8
その他	1	2.1
合計	47	100

アンケート回収率 33人/47人=70.2%

2015年夏期セミナーのアンケート

1. 授業実践でもやもやしていたところがクリアになった。
2. 自分で本を読み、見学するだけでは得られない実感を得て学習することが出来た。
とても充実した時間をありがとうございました。
3. 2日間の流れがとてもよかったです。初めての人でも学習内容がとても理解しやすい流れだったと思います。
4. このような学びの機会をいただけたこと、出会えたことに心より感謝いたします。2日間、一分一秒がもったいないほど、夢中でお話を聴きました。
5. 他人事ではなしに、自分のこととして考える。強く心に響きました。
6. 平沢さん、佐川さん、お二人の入所の方のお話を聞くことができた事が、とてもよい体験になりました。お話をいただいたこと事を、しっかり子供たちに伝えていき、「人権の森」を守っていきたいと思います。
7. 東京都の教員全員に対し研修を行ってほしいと思います。教員になる人間は知つておかなければ事実がここにはたくさんあると思います。
8. ハンセン病医学に関するセミナーも新鮮だった。大学で講師として教える際、取り上げ実践する方法としても役たつ。
9. 佐久間先生の報告、とてもよくわかりましたが、もっと時間をかけてお聞きしたかったです。

10. 都道府県、市区町村の教育委員会に申し入れて全教師対象にセミナーを開催してもらいたい。

2015年夏期セミナーに対する要望事項

	要望事項
1	県教育委員会を通して、多くの先生に参加してほしい
2	市教育委員会とタイアップの開催
3	具体的教材を用いた実践授業
4	少年少女舎のフィールドワーク、土壌の見学、入所者の方との交流
5	対象を広げて一般社会人の研修を行っていただきたい
6	社会的にも啓発活動を行っている方の実践報告があるとよい
7	東京都の教員全員に対し研修を行ってほしい
8	東村山の教員対象の企画があるとよい
9	このセミナーは、毎年行ったほうがよい。教育委員会を通して全教員にいくとよい
10	夏休みに3~4日間の集中したプログラムが必要
11	親子向けセミナーがあるとありがたいです
12	入所者の生活について知りたい

2016年ハンセン病と人権夏期セミナーの開催

2016年8月19日（金）「ハンセン病と人権」夏期セミナーを当館映像ホールで開催した。時間は午前10時から16時25分まで、118名の方々に参加していただいた。今年は対象を一般として広く参加を呼びかけた。実際には参加者の七割は教員で占められ、学校現場からの関心の高さがうかがえた。

本年度の内容は館長講義、ガイダンス映像視聴、語り部の平沢保治さんのお話、学芸員によるハンセン病医学・歴史等の講義、館内見学であった。

館長の講義では参加者に対する「あなたたちは差別者ではないのか」という問いかけから始まり、それぞれが内面に持つ差別意識について考えて欲しいと訴えた。その後、ガイダンス映像「ハンセン病を知っていますか」の視聴をはさみ、語り部の平沢保治さんから「ハンセン病と人権」というテーマでお話をいただいた。14歳で全生園に入所し

てからの半生を振り返りながら、今子ども達に伝えたいことは「命とこころの大切さ」であり、啓発活動の担い手となる子ども達への期待を語った。またそのためには教育が何よりも重要であるとした。

午後からは、儀同社会啓発課課長が「ハンセン病医学」について、金学芸員が「ハンセン病問題の歴史と資料館のあゆみ」というテーマで講義を行った。

展示見学では、長時間に渡ったプログラムにも関わらず、参加者からは疲れも見せず熱心に見学する様子が見られた。セミナーの最後に、黒尾学芸部長より代表者に修了証書を手渡し、本セミナーの幕を閉じた。

夏期セミナー修了後、参加者からアンケート66通が寄せられた。また、8月29日の毎日新聞に夏期セミナーの記事が掲載された。

2回目となる今年は、当館のホームページのみの広報であったにも関わらず、10代から80代まで幅広い年齢層、職域の方々から申込みをいただいた。受付締切り後の申込みも多くあり、映像ホールの定数の関係で残念ながらお断りしたが、主催者が想像する以上の反響だった。

今後は夏期セミナーを開催する回数を増やすこと、2日間コース、フィールドワーク、授業実践などの専門コースも考えたい。また今回いただいたご意見やご感想を参考に、内容をより充実させていきたい。

2016年夏期セミナー参加者

職種	人数(人)	%
教員	81	68.6
教育委員会	4	3.4
民生委員	1	0.8
県庁・区市役所	9	7.6
清掃事務組合	2	1.7
社会交流会館	1	0.8
NPO	2	1.7
学生	6	5.1
弁護士	1	0.8
会社	6	5.1
その他	6	5.1
合計	118人	100

アンケート回収66人/80人=82.5%

2016年夏期セミナーのアンケート

1. 今度、自校の生徒を連れて見学しようと思い、その前に自分自身でもしっかりと勉強しようと今回のセミナーに参加しました。
2. 最初の成田先生のお話で「他所事で片付けないで、自分のこととしてわかってほしい」という言葉で、生徒に伝えるべきメッセージが決まりました。私も生徒と一緒に向き合っていきたいです。次はセミナーに生徒を連れてきたいです。是非フィールドワークもよろしくお願いします。」(40代男性)
3. 改めて生きていく勇気、自分の立場を考える時間を与えてもらい、とても参考になった。(60代女性)
4. 一日という長い研修でしたが、館長の成田さんのはじめの言葉から、とても衝撃的で、心に突き刺さりました。差別について考える時、差別される側と、する側の構図ができる。大切なのは自分の目や耳で真実を知り、想像力をもって考えること、その先にできる事を行動に移すことであり、このセミナーに参加した一人としての役目なのではないかと感じました。(30代女性)
5. 成田先生の「同情しての涙」でなく、「その人の立場に立って、隣で涙を」との表現が心に残りました。相手の立場に身を置くことはなかなかできることではないので、せめて想像力を豊かにしたいと思います。
6. 平沢保治さんの力強いお話に感動しました。これからも長くご活躍ください。
7. 語り部平沢氏のお話、医学、歴史的見地からの講演と内容が多岐にわたる、非常に理解しやすいセミナーだったと思います。
8. 正直なところ何も知らなかったことを、はずかしく思っています。逆に知ることが出来うれしく思っています。そして、職場や子ども達にも伝えていきたいと思います。
9. 平沢さんのお話や館長のお話を伺って、啓発をすること、続けるためには長い年月が必要であって、当事者の方の声や、その人達の気持ちを感じ、自分に置き換えることができるか?と自分に何度も問い合わせていました。これからも、いつも自分に問いかけをしながら、人権尊重をしていきたいと考えています。

2016年夏期セミナーに対する要望事項

要望事項	
1	フィールドワークを行ってほしい。
2	図書館の本の紹介をしてほしい。
3	子ども達が今の問題として学べる企画を作っていただきたい。
4	ハンセン病と文学、ハンセン病と戦争などのテーマで講座をしてほしい。
5	もう少し掘り下げる内容があってもよい。たとえば1回目、2回目とわかる等。
6	女性の人権に当てた内容のものもあればと思います。
7	一人一人の歩みと思いを知ることができるようなもの。
8	回復者との座談会をして欲しい。
9	ハンセン病を通じて差別や社会を考える企画をお願いしたい。
10	ボランティアとして参加することも検討したいです。
11	是非7月にも開催して下さい。
12	この問題を真剣に考える人が一人でも増えるような啓発活動をして欲しいです。
13	看護師は、どのように過ごしどのように考えていたかを知れる企画を見たい。
14	参加者同士の意見交換ができるものがあると嬉しいです。
15	夏期セミナーを数日やって頂けるとありがたいです。
16	学校で一般教師が行っているハンセン病に特化した 授業の実践の紹介。

2017年(平成29年)ハンセン病と人権夏期セミナーの開催

2017年は、北海道の参加希望者の要望もあり、7月28日、8月18日の2日間開催した。それぞれ90人、80人の計170人の参加があり、2015年(50名)、2016年(120名)より大幅に参加人数が増えた。昨年度までは8月のみの開催であったため、人数がこの日に集中したが、今年度は7月に比べ8月の参加申し込みの出足は鈍かったが、その後『朝日新聞』にセミナー関連記事が掲載されたこともあり、申し込み者が増加した。以下、終了後の改善点等を示す。

1. 内容

今年度も昨年度同様、15分のDVD「ハンセン

病を知っていますか」視聴、ハンセン病医学講座、語り部講義、歴史講座、展示室見学であり、アンケートでは「内容が充実していて極めて分かりやすい」など大部分の方が内容に満足するという感想であった。そうした声とともに「さらに詳しい内容について知りたい」、「フィールドワークを開催してほしい」、「親子で参加できる企画をたててほしい」、「海外の事情についても知りたい」等、積極的にハンセン病問題に向き合おうとする声が多くあった。これらの感想や意見をもとに来年度以降、セミナーの複数回開催やセミナー対象者に限定した企画、少人数によるより専門的な内容の講座等、学校で授業化するためのテキスト作りなど外部講師の招聘についても視野に入れ、計画していきたい。

2. 参加者

今年度の特徴として、10代から80代までの幅広い層の参加者が見られたことがあげられる。また高校・大学の教員と生徒、親子、夫婦等、家族で参加される方々も見られた。職業別としては小中高の教員だけではなく、社会福祉施設、大学教員、看護師、一般企業職員等であった。新聞購読者による参加者は主に60代以上が多く、当館について初めて知ったという方がほとんどであった。また、関東近隣からの参加者が多かったが、神奈川、千葉など当館まで片道2時間以上かかる参加者も少なくなかった。中にはこれまで例年開催していた教員研修を中止し、本セミナーへの参加を決めた団体もあった。参加者から外部講演依頼の要望も出ており、患者・回復者の偏見・差別の解消と名誉回復のため、職場・地域・学校でハンセン病問題の普及啓発の担い手となっていただけることが期待できた。

3. 今後の検討事項

- ・H P以外の広報を検討する。
- ・より広い昼食会場を確保する。
- ・申し込み方法の改善（現状FAXでの申し込みに加えインターネットでの申し込みなど）。
- ・セミナーの開催時期、時間や内容、対象者、対象人数等の検討。
- ・セミナー開催にかかる人員の確保。

2017年7月夏期セミナー参加者

職種	人数(人)	%
教員	54	60.0
教育委員会	1	1.11
県庁・区市役所	5	5.5
社会交流会館	2	5.5
NPO	3	3.3
学生	3	3.3
弁護士	1	1.11
会社	5	5.5
病院	5	5.5
消防	1	1.11
福祉	1	1.11
その他	9	10.0
合計	90人	100.0

アンケート回収 44人/90人 = 48.9%

2017年7月夏期セミナーのアンケート

1. 今回、このセミナーに参加出来て、ハンセン病のこと、患者さんのこと、人権のことなど、たくさんの事を知ることが出来て、本当に良い経験が出来ました。
2. 自分自身がハンセン病について何も知らないということを改めて認識しました。「人権」、「差別」の問題は、非常にデリケートな問題だという思いもあり、なかなか正面から向き合えていませんでしたが、今回のお話を聞き、まずは自ら考え、そして教育に携わる者として子供達に伝えていこうと強く思いました。
3. 何度も資料館に来ていましたが、これだけまとまって講話を聞くのは初めてで受け取り切れないほどのたくさんのものを得ることができました。平沢さんのお話を聞けたのは、とても大きなことで、ずっと心に残ることになると思います。
4. 私は、日頃から憲法について学び、人権について考える機会がありますが、今回のセミナーを通じて、知識のなさや、学びを深め、それを発信できるようならねばと思いました。今回のこのセミナーでの学びから、よりハンセン病に関する歴史などを理解して、人権とは?を問い合わせていきたいと思います。

5. 私は1997年生まれなので、ハンセン病については今まで全くの無知でした。でもそれは言い訳であって、学ぶ機会は今までたくさんあったのだろうな、と考えると、自分も無関心だった人たちの一員だったのだなと感じました。このハンセン病の差別・偏見の根本を知ることで、現代の世の中にある同様のもの、いじめなどの問題の解決の糸口を発見できるのではないかと思います。

2017年7月夏期セミナーに対する要望事項

	要望事項
1	家族被害に関する展示。
2	ハンセン病に対する日本と外国での具体的な違い。
3	人権の森散策会があったら嬉しいです。
4	今後も同じ企画を続けてほしい。冬期セミナー、秋期セミナー、春期セミナー等。
5	今後も継続していただき、たくさんの方がハンセン病について学ぶ機会を提供していただきますようお願ひいたします。

2017年8月夏期セミナー参加者

職種	人数(人)	%
教員	15	18.75
県庁・区市役所	1	1.25
社会交流会館	1	1.25
NPO	4	5.0
学生	3	3.75
会社	16	20.0
病院	2	2.50
消防	1	1.25
福祉	1	1.25
その他	36	45.0
合計	80人	100

アンケート回収 50人/80人 = 62.5 %



2015年夏期セミナー佐川修さん講演



2017年夏期セミナー平沢保治さん講演

2017年8月夏期セミナーのアンケート

1. “子どもは地球の宝” 平沢さんの言葉に感動しました。平沢さんの言葉一つ一つが心に響きました。どうぞお体を大切にしてください。今回のセミナーでハンセン病について病理的・歴史的に学ぶことができました。今日学んだことはほんの一部だと思いますので、このことをきっかけにかかわっていきたいと思いました。子どもたちにも伝えていきたいと思います。
2. タイムスケジュールに沿い大変充実し濃い内容のセミナーでした。平沢さんのお話は実体験者として強く心に響く内容でした。成田館長の「他人ごとにせず自分ごと」で考えよ！という言葉は私の次の行動に結びつけるつもりです。ありがとうございました。
3. 成田館長の話にならって「人権を考える」上で私に出来ることは、今年5年生の担任なので子どもたちにハンセン病に関する知識や歴史的背景について私が「考える」のではなく、子どもたち自身に「気付かせる」ような授業を作っていくことだと思いました。
4. 素人にもわかる医学的な解説がとてもわかりやすく勉強になりました。平沢さんには入院中にもかかわらずご講演いただき感謝でいっぱいです。成田館長の人権のお話にはドキリとさせられました。自分自身何もしていないことがよく自覚できました。金さんのよどみない説明には晴れ晴れと聞き入りました。わかりやすかったです。
5. 何度も来館していますが、こんなに熱意あふれる皆様が働いていらっしゃるとは知りませんでした。資料館が活動する生き物として彩やかに見えてきました。

6. 現在高校2年生でハンセン病の方々のお話を直接伺いたいと思い参加させていただきました。あと10年すればハンセン病の差別の苦しみを知る方はほとんどいなくなってしまうと思います。若い世代がこのあやまちを正しく理解し、後世へ伝えることが大事だと改めて感じることができました。全生園の中も散歩できたので大満足です。ありがとうございました。
7. 教員をしていますが全く知らないことばかりで驚き通しの一日でした。差別や人権については外国語教育を通じて考えてきたつもりでしたが自分の中で理解できる部分と身体で拒んでいる部分があり生涯を通じての課題だと思います。生まれからこれまで受けた教育、生育環境などが大きく影響していると感じます。ただこのような私たちだからこそ次世代に語ることもあると思いますので学んだことを教育の中に生かしていこうと思います。
8. 長時間のセミナーでしたが、非常に充実した時間でした。人権について改めて考えるきっかけになりました。
9. 一日のセミナーですが、内容が充実していて、極めて分かりやすく、勉強になりました。ハンセン病の内容詳しく解説するとともに、啓発についても工夫がなされていて、優れたカリキュラムと考えます。関係者の方々の長年の熱意と努力の足跡が示されていて心動かされるものがありました。
10. 医学的面を含め充実した内容だったと思う。質問時間もそれなりにさかれており、双方でのセミナーとなった。

2017年8月夏期セミナーに対する要望事項

要望事項	
1	医療従事者では」ないのですが、ハンセン病の医療面のお話をさらに伺ってみたいです。
2	夏期セミナーを夏期以外にも一般向けに企画して頂けたらと思います。(例えば春休みとか)
3	他の人権問題とのコラボ。人権侵害を与える上で共通点を探る企画。
4	全生園の方を巡るツアーミたいのがあれば参加したいと思いました。
5	企業や地域のコミュニティーセンター等の人権担当者、社会教育主事の人向けのセミナーの開催。企業（職場）や地域でハンセン病の問題、歴史についてどう教えるかを学べるセミナー、講座をお願いします。
6	優生思想を掘り下げて、世界の流れの中で検証して欲しいです。

2018年(平成30年)ハンセン病と人権夏期セミナーの開催

2018年7月27日「ハンセン病と人権」夏期セミナーを当館映像ホールで開催した。今年で4年目を迎える。今年は対象を一般として広く参加を呼びかけた。猛暑のなか、日本全国（近隣地域から遠方は北海道、佐賀県、奈良県など）から68名の方々に参加していただいた。時間は午前10時から16時25分まで開催した。今年の特徴は、大学・高校の先生と生徒の参加者が多かったことである。

夏期セミナーでは、ハンセン病問題を総合的かつ体系的に学び、授業などにも生かせるよう「ハンセン病を知っていますか・DVD上映」、「ハンセン病医学（—ハンセン病問題から学ぶこと—）・講義」、「ハンセン病と人権（人生に絶望はない—ハンセン病とともに70余年—）・語り部のお話」、「館長挨拶」、「ハンセン病問題の歴史と資料館のあゆみ・講義」、「資料館見学」などのプログラムを実施した。

毎年、夏期セミナーの参加者から外部講演依頼の要望とハンセン病資料館来館数が増えており、患者・回復者の偏見・差別の解消と名誉回復のため、職場・地域・学校でハンセン病問題の普及啓発の担い手となっていただけることが期待できる。

2018年夏期セミナー参加者

職種	人数(人)	%
教員	15	22.1
教育委員会	2	2.9
民生委員	3	4.4
県庁・区市役所	5	7.4
NPO	1	1.5
学生	12	17.6
消防署	2	2.9
会社	6	8.8
その他	22	32.4
合計	68	100

アンケート回収 48人 / 68人 = 70.6%

2018年7月夏期セミナーのアンケート

1. 人の命や人権についてハンセン病を学ぶことを改めて考えることができました。ハンセン病患者の隔離政策がつい最近まで合法化されていたことに驚きと怒りを感じました。逆境の中にあっても希望や夢を持ち続けて強く優しい平沢さんのお話も心に響きました。園内を散策して大きくなつた木々に囲まれ、ここで生きてきた人たちの悲しみ苦しみ命の尊さを語りかけてくれたような気がします。また来たいです。（来館回数、はじめて）
2. 語り部さんが減ってきている中、このセミナーでたくさんのことを見ることができて本当に良かった。国の誤った政策はもちろんハンセン病のこと患者のことを知らなかった、知ろうとしなかった、知ろうとしなかったことも大きな誤りの一つなのではないかと思った。どんな格好をしていようがどんな病気や障害をもっていても「人」なんだという共通理解が大切だと改めて思った。今回の学びを通して次は私が周りに伝えるという行動をしていきたい。（来館回数、はじめて）
3. 来てよかったです。本やTVを通じて知っているつもりでしたが当事者の方々の話を直接聞くことは本やTVでは得られない力強さがありました。特に平沢さんのお話を伺ってハンセン病への差別は人災だと思いました。病気以外に社会が病気なんだと思いました。人がこれだけのことを人にしたというのは「絶望」ですが平沢さんの話を聞いて、それでも希望はある、頑張ろうと思いました。ありがとうございました。（来館回数、2回目）

4.	セミナー、語り部の会を含めて4回目の訪問になりますが何度も訪れても同じようなことはなく新たなことを学び思いを深めています。教師としてだけでなく「ひと」としての生き方を自分の中で問い直し自分自身を耕すかけがえのない機会となっています。心から感謝いたします。ありがとうございます。(来館回数、4回目)
5.	調布で8年前に平沢さんのお話を伺って以来、平沢さんのファンでお話をまた直接聞くことができとてもよい一日を過ごすことができました。何度も聞いても差別に対する人権無視の政策や私たちの意識の根深さに悔しさを感じつつ一方で平沢さんの愛に勇気をもらいます。私たちは平沢さんの話を聞いて今後はどのように生きていくのかということを考えいくことが大切なのだと改めて思いました。(来館回数、4回目)
6.	資料館は何度も見学させていただいていましたが詳しい話を聞いてみたくて参加させていただきました。レジュメや解説がわかりやすくハンセン病のことをもっと多くの方に知ってもらいたいと思いました。また平沢さんの力強い語りに心打たれました。儀同学芸員の「自分が気付かぬうちに差別をしている」という言葉を聞いて自分自身も知らぬ間にそうしているのだろうと改めて考えさせられました。(来館回数、8回目)
7.	「らいは治らない」としていたのは誰なのか?という成田館長の問いかけ。治るはずの病を不治とし感染症を遺伝病・伝染病と誤った認識を持ちつづけ嫌った社会、世間。正さなかった国、行政。どこで間違えたのか間違いに気づいた時に正そうとしたかったのはなぜなのかを検証しつづけることが必要だと感じました。今も新しい差別・偏見が生まれつづけているからこそ。自分は差別をする側にいるかもしれない意識しなければ気づかないことが沢山あると思います。

2018年7月夏期セミナーに対する要望事項

要望事項	
1	女性の体験者のお話を聞いてみたいです。強制隔離政策を進めてきた側の人のお話は実現できないでしょうか。
2	もうすでにされているかもしれません、患者さん達の創作活動(文学なども)についてもっと知りたいです。

3	若い世代がどう感じたかを知りたい。世界各国のハンセン病対策の歴史について⇒なぜ日本が遅れたのかが浮き出るような内容
4	医師、看護師、職員の意識、生活についても知りたい。
5	ハンセン病についてお話を下さった方との名刺がたくさんほしいから、名刺交換をする企画があるとたくさんの人とふれ合うことができると思います。
6	ひき続き今回のような夏期セミナー、資料提供はあります。
7	標本胎児のことをとりあげてほしいです。(あまり知られていないので)
8	いつも大切な学びの機会をいただき、ありがとうございます。いつか、性別、年代(年齢)などを問わず、ハンセン病を通して学んだことを意見交流できる場ができましたら幸いです。

考察

「ハンセン病と人権」夏期セミナーは、2015年に教員向けに第1回夏期セミナー(2日間)には、定数60人に対し47人が、2016年に対象を限定せずに第2回夏期セミナー(1日間)には、定数50人に対し、118人が参加した。第2回は、職種を限定せず、1日開催としたことで、定員を大幅に上回る参加者となった。しかし、第2回の118人の参加者の70%は、教員であったこと、しかも、学校単位、教育委員会単位の参加者が増えたことから2015年夏期セミナーのような教員に特化した夏期セミナーの開催を考えなければならない。2017年、第3回夏期セミナーは、「北海道の学校は、8月中旬から授業が始まるので7月に開催して頂きたい」などの要望が出ていたことから、7月と8月の2回開催した。各回定員50名に対し、7月90名、8月80名で、合計170名が参加した。

2018年、第4回夏期セミナーは、8月の日程上の都合で7月1回開催とした。今年の特徴は、大学、高校の教師と生徒、親子の参加者が増えたことである。このことから学校としてハンセン病問題に取り組んでいただけることが期待できる。

都道府県職員、教育委員会、教員、企業の人権担当者などの参加者から寄せられたご意見やアンケートから、「ハンセン病と人権」夏期セミナーの開催が期待されていたということが明らかに

なった。また夏期セミナーに参加された方々から、「夏期セミナーを継続して開催して頂きたい」、「学校や職場に来て講演をしていただきたい」、「都道府県の教育委員会に申し入れて、すべての先生に聞いて頂きたい」との要望があった。これまで要望の強かった親子で学ぶハンセン病講座、出張夏期セミナーについては開催したが、今後、1日講座、2日講座、専門講座、授業実践のための講座についても具体化を検討したい。

3. 外部講演の取り組み

外部講演は、2015年度以前も語り部や学芸員等によって行われてきたが、年数回を数えるにとどまっていた。要請の多い語り部の外部講演も、高齢化にともない年々困難になる中、社会啓発課は館外での社会啓発活動を一つの大きな柱とすることとなった。

課員2名を中心とする外部講演について、近隣学校、教育委員会への周知も行ったが、2015年度より当館ホームページに情報掲載を行ったため、ホームページからの申込みが多かった。2015年度から2018年度（2018年12月現在）までの具体的な取組みは次の通りである。

2015（平成27）年

職種	団体数	人数(人)	% (人数)
小学校	2	230	4.2
中学校	6	2264	41.4
高校	2	1284	23.5
大学	5	887	16.2
看護学校・医療関係	3	150	2.7
教育委員会・教員	5	248	4.5
官公庁	3	180	3.2
一般	5	220	4.0
合計	31	5463	99.7

2015年度は、外部講演をホームページに掲載し、募集を行った初年度であったため上半期の申込は少なかったが、夏以降、申込団体も増え、最終的には外部講演参加者数は5363人となった。この人数は、当館の年間来館者数の約2割にあたり、需要の高さが明らかになった。

団体の種別ごとの人数と全体の割合を見ると、小学校から大学までの全体の割合は85%を超え、学校教育におけるニーズの高さが特徴的である。特に中学校からの申込数が最も多く、参加人数も全体の4割を超えた。これは、中学校の学年生が多く、当館へ一度に見学が不可能である点や、当館までの移動時間、距離の問題にも起因すると考えられる。

学校現場では授業時間、コマ数が決められているため、柔軟に対応することにより、学校現場でハンセン病関連授業時間を設定していただけ、さらなる需要が見込まれると予想される。館内における社会啓発活動だけではなく、館外における活動の可能性の高さが表れた結果となった。

参加者からの声

[小学生]

- ・私はハンセン病について全く知らなかつたので、とても勉強になりました。今、自分にできることは、ハンセン病のことを友人や家族に話し、そこからどんどん広がっていけばいいと思います。
- ・人間が人間を差別してしまうのではなくて、病気の人間を守っていくなどの行動をしていくべきだと考えた。自分も自分や周りの人と違う部分があるから、差別はしないようにしたい。
- ・人同士の違いを（自分もふくめて）「欠点」という言葉に置きかえず、「違い」として考えるようにしたい。

[中学生]

- ・今回のお話を通じて、ハンセン病に対する偏見があったことを知りました。ハンセン病以外にも偏見を持たれている病気はたくさんあると思うので、なくしていくかなければならないと思いました。
- ・病気というのはかかってしまった本人が一番辛いはずなのに、その周りにいる人たちが差別をするのは本当にいけない事だと思います。

[大学生]

- ・特に印象に残ったのが「差別は無意識のうちに起こる」ということだ。確かに自分も知識がないままにハンセン病は恐ろしいという意識があった。

- ・誰もが差別に関して無関係ではない。ただ単に同情するのではなく、「自分がいつでも被差別者の立場になり得る」ことを人々全員が認識することが元ハンセン病患者の方々に対しての大きな償いになるのではないか。
- ・患者の高齢化が進んでしまった今は、生活の保障や社会復帰の支援、名誉の回復といった償いしかできない。しかし、世の中には今も新しい差別が生まれており、ハンセン病とは関係のないことであっても、個人が正しい知識を持つことによって、新しい差別を抑制することが患者への償いに繋がる。

看護学生

- ・病気の治療もそうだが人に言えない、言つたら社会から嫌われるなど、社会的にも大変な思いをしていることがわかった。また後遺症による顔・身体の変形はあるかもしれないが、一人の人間として対等に接することが大切で、思いやりの心と正しい知識が必要であると思った。
- ・国からも差別を受けたという壮絶な背景がある患者さんにどういう言葉をかければいいかわからないという質問に対し、「その人に共感すること」、「患者さんと話をすることが大切」と回答されたことがとても印象に残った。このことはどんな患者さんにも共通することだと思うので、この気持ちを大事にしていきたい。

2016（平成28）年度

職種	団体数	人数(人)	%
小学校	4	686	14.1
中学校	6	1,627	33.4
高校	1	10	0.2
大学	4	335	6.8
看護学校・医療関係	5	530	10.9
教育委員会・教員	9	339	6.9
官公庁	6	910	17.0
一般	7	500	10.2
合計	42	4,937	99.5

2016年度は昨年に引き続きホームページのみの広報であったが、申込件数が2015年度の1.3倍増となった。高校の申込は昨年度に比べ1件減少したため、人数も減少した。しかし、今年度は教育

委員会・教員の団体申込件数が増加し、全体の約25%を占めた。教育関係者からの関心の高さが示された結果となった。

今年度の特徴は、小学校から大学までの割合とその他社会人の層がほぼ1対1となったことである。さらに医療、教育関係、官公庁以外に社会教育施設や企業からの一般団体申込みがあり、様々な分野からの関心の高さがうかがえる結果となつた。



議同参与による外部講演の様子

参加者からの声

【小学生】

・ハンセン病のお話をききながら、ハンセン病のかん者さんの気持ちを考えると、泣きそうになりました。私には想像する事しかできませんが、療養所で暮らす日々はどれくらいつらかっただろうと思いました。

・お話の中で特に療養所での生活が印象に残りました。望郷の丘であるさとを思い出すことがあるときいたときには、とても悲しい気持ちになりました。らい予防法がなくなった今でもハンセン病の回復者の心には傷が残っていて、しかも失われた年月は戻ってきません。だから今、私たちにできることを取り組んでいきたいと思います。

【大学生】

・最近、ヘイトスピーチの勉強をしていて人権についても、日本は法律の整備がかなり遅れていると感じていましたが、「らい予防法」の廃止についても遅れたという事実に問題意識を持ちました。島国という地理要因が大きいのかもしれません、マイノリティや人権について日本はまだまだ努力が必要だと思います。

[教員（小学校）]

- ・昨年6年生を担任し、1回目に指導をした子どもたちには私自身ハンセン病についての知識不足であり、今回の研修を受け申し訳ない気持ちでいっぱいになりました。児童の「知りたい」と思う気持ちを引き出すために、どのように出会わせるかということが大事であると考えました。今回学んだ人権問題に関心をもつ感性を育てることを大切に指導していきたいと思いました。
- ・無意識における差別意識・偏見、わがことと思いました。深く反省の思いです。
- ・病気を知らず、「癪」と聞いただけで恐ろしいと感じていました。しかし、学ぶことにより身震いするほど恐れていた自分の感情も安心させることができました。無知を恥じています。よく知ることは大事ですね。
- ・差別とは、やはり、自分もしているのだと考えさせられた。家族は、どんなに胸が張り裂ける人生を送ったのだろう。
- ・知らずに来たことをすまなく思いました。ハンセン病と烙印を押された人々も私と同じ人です。これから生きよい社会づくりに参加していきます。
- ・ハンセン病について今までずっと他人事として考えてきたように思います。近くに患者の方もいないため、実感がわかないことも事実ではありますが、講演の中で「差別意識は無自覚」なものであるといわれていたように、認識していても自分が差別者になりうるということを知りました。ハンセン病の方に限らず、自分の言動などが、どのように相手に害をおよぼしてしまうのか、日々気にかけて生きてゆきたいと思います。

2017（平成29）年度

職種	団体数	人数(人)	%
小学校	4	692	9.2
中学校	8	3,247	43.3
高校	0	0	0
大学	16	1,274	17
看護学校・医療関係	2	110	1.5
教育委員会・教員	3	80	1.1
官公庁	11	1,370	18.3
一般	9	720	9.6
合計	53	7,493	100

2017年度に入り、外部講演事業は3年目を迎えた。本年度も主な広報はホームページのみであったが、特徴としては前年度までに依頼をした団体が継続して申し込みをするという事例が増え、結果的に新規の申し込み団体も含めると件数、参加人数ともに大幅に増加した点があげられる。また、大学からの依頼が増えたことも特徴としてあった。法学部、歴史学部、美術学部など、多岐にわたる専門分野からの視点でハンセン病問題を捉えようとする依頼者の増加があった。大学だけではなく、一般団体からもその他の社会問題やマイノリティに関する課題につなげ、ハンセン病問題を通して社会の実態を捉えようとする参加者の増加が特徴的であった。

一方で高校からの依頼は本年度、ゼロとなり、若い世代へのアプローチが課題としてあげられた。当館への来館者においても若い世代は多くない。館内事業と合わせた取り組みが必要であるとの認識を持つこととなった。

参加者からの声

[小学生]

- ・私は今日のお話を聞いて、普段あたり前のように自由を生きることができていることの大切さをあらためて感じました。当時、ハンセン病になってしまった人は、家族や友達など会いたい人に会うことができなくなり、本当にかわいそうだと思いました。また、もう少し早くきまりをかえていれば、幸せになれた人もいたと思います。今日のお話のおかげで生きることの幸せを実感しました。
- ・私はハンセン病の患者さんは、施設に隔離され、家族ともはなればなれになってしまい、さびしかったのと同時に不安だったのではないかと思いました。それでも自分らしく生きるために運動を続け、力強く生きてきた人々はすごいと思いました。これからは差別のない平和な世の中になってほしいと思いました。

[中学生]

- ・当時の療養所の様子が、とても人の病気を治すための場所には思えなかった。しかし、それと同時に私も病気の詳細を知らなかつたら、ハンセン病の目に見える変形などの後遺症に眉をひそめてしまうのではないかという自分の中にあるかもしれない差別の心に恐怖を抱いた。無知は時に凶器となって人を傷つけてしまう。そのため、ハンセン病に限らず、世間から誤解や差別をされている病気を知る努力をし続けていかなければと思う。
- ・絶望の中にいてなお、自分たちの生きる意味や道を見つけるとするハンセン病回復者たちの姿はとても力強いと感じました。これから先、体験者たちがいなくなっていてもハンセン病に関する歴史は失ってはいけないものです。

[看護学生]

- ・講演を聞く中で普段、生活している中で無意識で差別していることが、自分にもあるのではないかと思い、はつとした。「相手の立場になって考える」という看護の場で大切にしていることを実生活でも生かしていけたらと思う機会となった。
- ・障害を持つことでその人が生きにくい人生になってしまいるのは、障害のない人の障害に対する知識や理解が不十分であるためだろう。将来医療従事者を目指す者として、生きにくい世界を変えたい。ハンセン病に限らず、障害を持っている立場になり、考えることが大切だと思った。

[大学生]

- ・私たちは、差別、偏見に対して自分に無関係なことだと思わずに、自分の心の中にも差別意識があることを認識することが大切だ。そうすることで、ハンセン病回復の方だけでなく、病気や障害を持っている人も生きづらさを感じることなく、人間らしい生活を送ることができると思う。
- ・国が法律を撤廃しなかったことは問題だと同時に誰もがハンセン病患者は遠ざけるべき存在していたことがより問題であると思った。なぜ誰も疑問に思わなかつたのか。当たり前のことと認識していたのであれば、当たり前というのはとても恐ろしいものだと思う。解決するための方法や知識の使い方を学んでいきたいと感じた。

[一般]

- ・今まで大まかな概要しか知らずにきたハンセン病問題についての歴史や現状を知った。患者である方々の苦しみは理解しようとしても到底できないのだろうと、その問題の大きさに衝撃を受けたのと同時に、「自分自身がいつでも差別者の立場に立つことがあり得る」という言葉にはつとさせられた。学校で将来を担う子供たちに対して、今日、自分が感じたことをありのままに伝えていたらと思う。どんな障害や病気を抱えていても「人は人である」ということを前提に、活動や交流を共にする中で共存・共生が当たり前だと感じられるような子供たちを育てていけたらと思った。(教員)

2018（平成30）年度（2018年12月時点）

職種	団体数	人数(人)	%
小学校	5	596	5.8
中学校	9	2,362	23.1
高校	1	322	3.1
大学	14	1,487	14.5
看護学校・ 医療関係	6	450	4.4
教育委員会・ 教員	17	1,287	12.6
官公庁	23	2,899	28.4
一般	12	820	8
合計	87	10,223	99.9

2018年度は、昨年度までと比べ、さらに件数、人数が飛躍的に增加了。その要因としては前年度の特徴としても述べたが、リピーターによる依頼に加え、運営委託財団からの広報活動により、官公庁、教育委員会からの依頼が増加したことが考えられる。課員2名では対応が困難になり、課外の学芸員も動員しての対応に追われた。ハンセン病問題に関心のある需要の増加は、肯定的に捉えることができる。ただ、今後はその後、どのように参加者の意識が変わったのか、学びがあったのか等、感想を元にした意識調査が必要であると感じた。

当館の設置目的については、2008年に制定された「ハンセン病問題の解決の促進に関する法律」の第18条「名誉の回復及び死没者の追悼」に「国

は、ハンセン病の患者であった者等の名誉の回復を図るため、国立のハンセン病資料館の設置」をするということが示されている。ハンセン病患者・回復者の名誉の回復とは具体的に何を意味するのか。

当館館長の成田稔は、「名誉の回復を図るために何をすればよいかと問題提起をした上で下記の通りのべる。

同条にある「国立のハンセン病資料館の設置、歴史的建造物の保存等」はよいとして、それに続く「ハンセン病及びハンセン病対策」という、病気とそれへの政策との異なる二つの主語を並べて、述語にあたる法文が「(ハンセン病の)歴史に関する正しい知識」とあるのは、本当は「ハンセン病の正しい知識」と、「ハンセン病対策の歴史に関する誤った認識」ではないのだろうか。さらにその後に続く「普及啓発」は、「正しい知識の普及」と、「誤った認識をただす啓発」とであってよい⁽¹⁾。(下線：筆者)

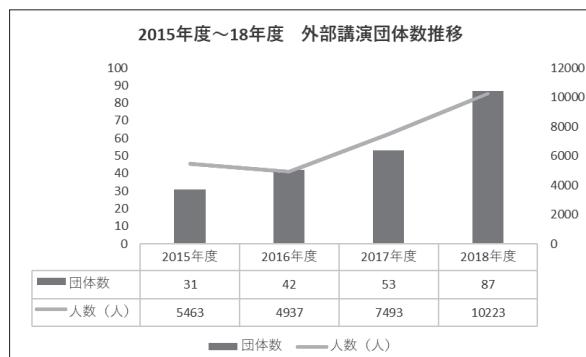
ハンセン病問題の社会啓発活動においては、この指摘のように、「正しい知識の普及」だけではなく、「誤った認識をただす啓発」が求められているのではないだろうか。社会啓発課が誕生し、館外に向けたより積極的な啓発活動に注力し始めてから4年が過ぎようとしている。参加者数と需要の高さについてはこれまで概観してきた通りである。講演後の感想文やアンケートを見ると、ハンセン病や歴史、人権についての理解が深まったという声だけではなく、参加者自身が自分自身を振り返り、今後に生かそうとする声も多く寄せられた。

特に小学生の声としてあった「ハンセン病のお話をききながら、ハンセン病のかん者さんの気持ちを考えると、泣きそうになりました。私には想像する事しかできませんが、療養所で暮らす日々はどれくらいつらかったんだろうと思いました」という声からは、他者を理解しようとする「共感」

が表れ、「人同士の違いを（自分もふくめて）「欠点」という言葉に置きかえず、「違い」として考えるようにしたい」という声からは、学びを生かして自身の今後の行動に生かそうとする姿勢が見られた。

以上のように大人の参加者だけではなく、小学生をはじめとする若い層にもハンセン病の歴史、ハンセン病問題を通して命と人権の大切さを学ぶことの意味が十分に示される結果となった。「ハンセン病問題」と言われる学びから、何を得るのか。これまでの感想から参加者らの「変化」を見てとれる。少しでも自らの心が震える経験を外部での講演会や資料館見学の中で感じてもらえる機会となるのであれば、それは自分とは異なる他者への理解や共感を呼ぶ第一歩となるのではないか。

今後もこれまでいただいた参加者からの感想を生かし、ハンセン病患者・回復者に対する偏見・差別の解消と名誉回復のため、そしてハンセン病患者・回復者が伝えたい思いをくみながら当館における社会啓発活動を充実させていく所存である。



金学芸員による外部講演の様子

(1) 成田稔「国立ハンセン病資料館」の設置目的である「名誉回復」について『国立ハンセン病資料館研究紀要』第2号、2011年、6頁。